

Special Interview

スタッフの生の声を聞くインタビューコーナー。
どのような経験を経て今に至り、
現在、どのような思いを持っているのかを聞いてみました。

かわいいものが好き
今、楽しいです

デザイナー・絵画教室講師
中村 帆高
NAKAMURA HODAKA

静岡県出身のグラフィックデザイナー。浜松デザインカレッジ出身。現在は株式会社サウザンドデザインにて、月刊の通販冊子のデザインの中心となり活躍している。絵画教室ではその親しみやすさやアイデアの豊富さで人気を呼んでいる。デジタルでイラストを描くのが得意。



「かわいい」が好き

編: さっそく、今に至るまでの経緯を教えてください。

中村: 幼稚園の頃から絵が好きで、自然と絵を描いていました。当時お母さんとやっていた交換日記で、お母さんがかわいいほんなわしたイラストを描いてくれて、それを見て「かわいいー」と思って描くようになったんだと思います。

イラスト関係の仕事につきたいと思ったのは中学校のときです。クラス新聞を作ったりする広報委員会に入っていて、そこでみんなに「上手だね」と言ってもらえたのがきっかけです。

高校は総合学科で一年生の終わり頃から自分で授業を選択していく、ちよつと大々学みたいなシステムの学校でした。そこで私はイラストやデザインを選択して高校時代はたくさん絵を描いていました。それから、専門学校に行きました。浜松デザインカレッジには中学校の頃からずっと行きたくて。中学校で見学に行ったとき、お城みたいでふわふわの感じの内装がすごくかわいくて、「かわいいーすーいー！ 専門学校って」って思ってた。

編: 他の学校は眼中になかったのですか？
中村: オープンキャンパスで、やる内容がいなくなって思った学校はいくつか行っただけです。

けど、やっぱりそこにしましたね。
編: 専門学校ではどんなことを勉強していましたか？

中村: 高校まではパソコンには全く向かっていなくて、鉛筆や色鉛筆でイラストや風景とかを描いていたんですけど、専門学校ではそういうのはほとんどなくて、イラストレーターやフォトショップで写真を加工するとか、実際の仕事に近い感じのことをやりました。

コースは大きくデザイン、ファッション、メイク、ビジネスなどに別れていて、いろいろなジャンルに触れることができ、自分に合ったものを探していくという感じの学校でした。

やりたい仕事と 実際の仕事の難しさ

編: 卒業後の進路はどうしましたか？

中村: 出身が静岡の袋井市なのですが、上京したくて東京や神奈川、埼玉あたりで仕事を探していました。

最初に就職したのは東京の高級なお菓子屋さんでした。そこを選んだ一番の理由はパッケージを作れることでした。今までに学んだことを生かしたくて。ほかにも会社のパンフレット制作やお店の前の看板に絵を描いたりできるということで、決めました。

編: そこでの仕事はどうでしたか？

中村: 楽しかったですね。楽しかったけど、そういったデザインの仕事をやる人がお店に私しかいなかったんで、デザインの専門家としてのアドバイスを得ることもできず、何が正解かわりませんでした。これだよいのだろうかと思いつつ手探りでやっていました。また、お店では接客や製造の方の仕事も忙しかったので、デザインの作業をする時間がなかなか取れませんでした。それで結局家で作業したことも…。

転職してからの学び

編: デザイン会社に転職して、どうですか？

中村: 専門学校でポスターとかを作る授業が結構あったので、活かせるかなと思っていました。ですが、そうでもないなと思いましたが、やっぱり学校でやるものと会社でやるものは違うなって。結構ルール、「これはやらない方がいい」とか決まってるじゃないですか。フロント選びとか、「ここは大きくした方がいいとか。学校だとそこまできちんとした決まりもなく、自由に作っていました。全然違うものだなと思いましたね。

編: 想像していたデザイナーとのギャップはありましたか？

中村: デザイナーってひたすら制作みたいなイメージがあったんですけど、お客さんと関わるのが意外と多いなと思いました。原稿も直接送られてきたり。そうやってやりとりしているとお客さんの人間性が見えてきて、実際の原稿をみると、「この担当者はこういう感じのデザインがいいかな」とか考えられるのはいいなと思います。

編: 「かわいい」というのが中村さんの中でひとつのテーマになっていますね。それは仕事のどこかで活かしていますか？

中村: 仕事ではあまり出してないと思うのですが、反対に仕事で学んだ知識でより一層かわいいものが自分で作れていると思います。

最近はずをしつ

かり組むのって大事
だなんて学びました。学

校ではそういうことはあまり習いませんでした。大事なことは大きく、とかそれくらいの知識しかなかったんで、なるほど字はこうやって組むんだって、自分で絵を描いたり作品を作ったりするときにも、これは結構使えるなって(笑)

編: プライベートで絵を描くことも結構あるのですか？
中村: そうですね。プライベートでは、好きな分野でいろんな人の目に触れるようなイラストを描いたりしています。

編: 中村さんはスマホですごくかわいい絵を描きますよね。そういったデジタルのイラストはいつ頃から描いていたのですか？
中村: 中学の終わりの春休みにスマホを買ってからはからです。それからずっと。

編: デジタルとアナログの違いはどんなイメージですか？
中村: 基本デジタルで描くことが多いのですが、アナログだとちよつとずれてもなんかいい感じに見える。そういう絵って感じに見える。ほわほわしたかわいい感じとか、絵の世界観が出るのがアナログかなって思います。デジタルの方が得意です。もともと戻せるのが大きいですね。失敗してもなんとかなる(笑)

自分がいいなあって 思ったことを

編: デザイナーになりたいという子どもたちがいたら、どんなアドバイスをしますか？

中村: なったらいと思う(笑)

専門の学校に行くとか、みんな上手だから、こつこつと絵を描くんだって影響されたり、周りが見えるのでもいいなと思います。いろんな人と関われるのもいいと思います。

あとほとんかくたくさん描いて周りをみる。描きたいものを書いていけばいいんじゃないかと思えます。今はネットでもいろいろ見れる時代なので、いろんな人の作品を見て、「これいいな」というのを見つけたら、まねをして吸収させてもらって。そしてたら上手になる気がします。絵は描いて無駄になることはないと思います。わたしも実際会社で絵を描く機会は少ないですが、自分のために使えているので。

編: 具体的に仕事に就くために動いた方がいいことなどはありますか？

中村: 私が地方出身だったというのかもしれませんが、専門学校でも私の周りはデザイン系の仕事に進んだ子がほとんどいませんでした。地元にはそういった就職先がないので。あつても取り合いになるんですよ(笑)。引越してからのほうが面接に通る確率もぜんぜん違ったから、私はこつこつに引越してよかったです。やっぱり東京とか人の多いところはとにかく会社の多さも全然違うので、就職しやすいと思います。

編: 最後にこれを読んでる人に言いたいことは？

中村: 好きなことをやっていけば何かしらで使える。自分がいいなあって思ったことをいっばいやってくと楽しそう(笑)

編: 今、楽しいですか？
中村: 楽しいです。